

令和8年、今年の干支は午です。馬については、郷土誌への扉の「牧園と馬(令和元年5月号)」や「勸業知事と草競馬(令和5年10月号)」で紹介してきました。今回は伝説の名馬と、初午祭で奉納される馬踊りについて紹介します。

馬は権力の証

馬と、馬の飼育に関わる知識や経験をもつ馬飼の人々が朝鮮半島から日本列島へ渡ったのは、古墳時代中期(5世紀ごろ)とされています。古墳には副葬品として馬具が収められたり、豪華な飾り馬具を付けた馬形埴輪が並べられたりしていることがあり、馬そのものが有力者の権力を誇示していたものと考えられます。

名馬「いけづき」

鎌倉幕府の初代征夷大将軍である源頼朝が所有した名馬「いけづき」は、寿永3(1184)年の宇治川の戦いで活躍した伝説が語り継がれています。諸説ありますが、横川町郷土誌に

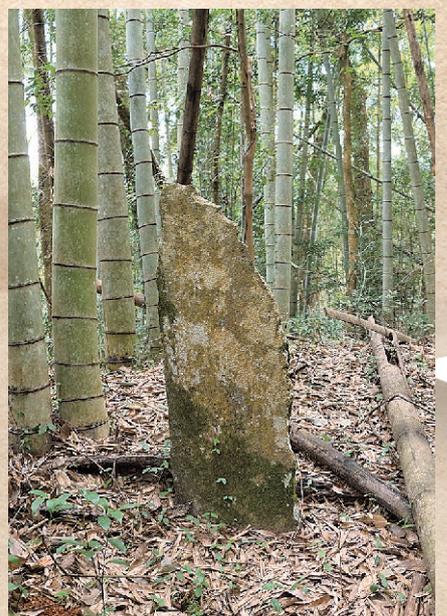
よると、いけづきは指宿市開聞産の馬で、源頼朝が家来を遣わして求めたものだとされています。横川町下ノ赤水の竹林の中には、いけづきの墓とされる約150センチの自然石がひっそりとたたずんでいます。

馬踊り

春の訪れを告げる鹿兒島神宮の初午祭で奉納されるのが、馬踊りです。その本来の目的は、馬の健康や多産祈



願、豊作祈願でしたが、今では商売繁盛や厄払い、歳祝いなどの目的で奉納されることが多くなりました。鞍に糊俵、造花、鈴、初鼓などを飾りつけた「鈴かけ馬」。馬踊りは、轡に結んだ手綱と後ろ手綱で鈴かけ馬を操り、三味線や太鼓、鉦などの囃子のリズムに合わせて、頭を上下に振りながら軽やかにステップを踏むように踊ることから「鈴かけ馬踊り」といわれます。また、旧暦1月18日に行われて



いけづきの墓とされる自然石

延の3人の夢に馬頭観音が現れ、御堂を建てたことに始まる説。もう一つは、神宮のお祭りに使われる御神馬を飼育していた良市加治木町木田の人々が、毎年旧暦1月18日に参拝していた



「薩摩の馬踊りの習俗」の映像記録はこちら

いたことから「十八日の馬」とも呼ばれています。現在は、旧暦1月18日を過ぎた次の日曜日に行われていて、今年3月8日に開かれます。馬の後ろに鳴り物や踊り連が連なり、人馬一体となつて鹿兒島神宮の参道や境内を練り踊る光景は壮観です。

馬踊りの由来は2説あり、一つは室町時代に大隅正八幡宮・鹿兒島神宮)の改修工事を行っていた島津貴久と弥勒院の日秀上人、神官の桑畑道

ことが始まりという説です。馬踊りは旧薩摩藩領の各地に受け継がれていますが、鹿兒島神宮の馬踊りが波及し広まったものと考えられています。そんな馬踊りは「薩摩の馬踊りの習俗」として、国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選挙されており、「十八日の馬」として市の無形民俗文化財に指定されています。一昔前まで農耕や運搬、移動手段、戦などに重宝され、日常生活に欠かせない存在だった馬。これまでの長い歴史の中で人の良き相棒となり、今ではスポーツや伝統行事などで人々に愛されています。

午年の今年、馬に関する場所を訪れたり、イベントに参加したりしてみたいかがででしょうか。

(文責 森)

郷土への扉

The gateway to local history